
ＥＳＰ部のとある軌条

式織 檻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ESP部のとある軌条

【Zマーク】

N9737C

【作者名】

式織 檻

【あらすじ】

某県立高校ESP部の、とある軌条の、とある連なり。

とある県立高校の、夏休み初日。

前日に比べて明らかに人口密度が低くなつた校舎内、その部室棟の三階の『ESP研究会』の部室で、一名の生徒がくつろいでいた。

「あつつい~」

部室の中ほどの椅子の上、プラスチックの下敷きでバタバタ仰ぎながら、ショートヘアの女子生徒、五月が唸るように言った。

「ちょっと、坂巻君、家から扇風機持ってきてよ~」

「ウチに扇風機ないよ。去年建て替えたおかげで全室クーラーになつたんだ」

窓際で雑誌をめくつていた坂巻は、声だけで答える。

「じゃ、クーラー持つてきて」

「できるか!」

今度はさすがに顔を上げて反論した。五月はへんっと嘲りながら、「まったく、思いやりの欠片もないわね~」

「……お前はどうなんだ」

呆れるように言いながら、坂巻が再度雑誌に戻ろうとしたその時、コンコンッ

入口のドアがノックされた。

「あ、はい」

と答え、坂巻はドアの方を見やる。

横開きの部室の扉は、現在、風通しがいいように半分開けられており、そこから廊下が見えている。しかしそこに人影はなく、じゃあノックの主はもう半分に隠れてるのかと思いながら、坂巻は雑誌を傍らに置き、来訪者を迎えるために立ち上がつた。

少なくとも現部員にはドアをノックするなんて習慣はないし、じやあ先生だろうか、でも顧問の春日井先生は今週は来ないと聞いてたはずだけど、と坂巻が思考を巡らせつづドアに近づいていくと、

「お、坂巻君。ひつさしぶりー」

坂巻がドアにたどり着く直前、ひょいと顔を覗かせてきたのは、ウェーブのかかったセミロングの髪を揺らしている女性。ノースリーブにジーンズという、学校敷地内ではあまり見かけない私服を纏っている。

その女性の顔を見て、坂巻は一瞬口元を歪ませ、

「げ…………お久しふりです。心深先輩」

「…………ちよい待ち。なぜに麗しの先輩が久しふりに会いに来たつてのに、第一声が『げ』なの？」

「いやいや、気のせいじゃないですか？ もしくは聞き間違えとか？ 幻聴つてやつですか？ きっと先輩、新しい環境に入つて知らず知らずのうちにストレスでも溜めちゃつてるんですよ。だからそんな被害妄想的な声が聞こえるんです。うわー、大学生つて大変なんですねー。先輩のこと、心配だなあ。本当、心配だ。これじゃあ僕、心配で心配で夜も眠れませんよ」

大振りのジャスチャーで答える坂巻。

「…………やけにわざとらしいわね。まあ、そういうことにしているてあげるわ。それより、他のみんなは？」

心深はきょろきょろと部屋の中を見回す。下敷きを振つていた五月と日が合い、五月は首を曲げて会釈した。心深は笑顔で手を振り、それに返す。

扉の脇に立ち尽くしたままの坂巻が、

「現部長は今特別授業で、三時頃来るそうですよ。受験生ですからね」

「いや、あの可愛げのない眼鏡君はどうでもいいのよ。それより新入生は？ 一年生の女の子が入つたつていうじゃない」

「ああ、まいみちゃんですか？ まだ来てないですね。そろそろ来るんじゃないですか？ 今日の部活は一時から開始予定ですから」

そう言いながら、坂巻は壁時計に目をやつた。長針と短針は十一時五十分を示している。

「ん？ 眼鏡君が来ないのに、部活始めるの？」

「ええ。藤沢が仕切れますよ。仮にも副部長ですから」

「ああ、あの子が副部長になつたんだつけね。意外なような、そうでもないような。……しかし、少し心配な気もするわね」

「……まあ、そうですね」

苦笑いを浮かべる坂巻。心深は腕を組んで、うーんとじばらく考え込む仕草をした後、

「……心配だし、今日は私が仕切つてあげようか？」

「ええ？ ……いや、そんな、わざわざお忙しい先輩の手を煩わせる」ともありませんよ。大丈夫です。心配いりませんよ。何かあつてもちゃんと僕がフォローしますから。もう先輩は、今すぐ回れ右して帰つていただいてもなんら問題ありません」

「……言葉の端々にとげがあるのよね。あんた、そんなに私のことが嫌い？ そりや、去年はすこ～しじばかり可愛がつちゃつたけどさ」心深はいくぶんしおらしい顔を作り、坂巻の目を直視した。

「いや、そんな、心深先輩のことが嫌いなわけないじゃないですか。ありえませんよ。タイムトラベルが明日実現されるくらいあります。心深先輩が嫌いな人なんて、人じやありませんよ」

段々坂巻の目の焦点が定まらなくなつていき、

「僕だつて例外じゃないですよ？ そりやもつ、心深先輩のことを愛してると言つても過言じゃないです。ええ、もう愛してますよ。愛してますつたら愛してます。実は明日告白しに行こうと思つてたところです。何なら今返事をもらえます」

「ちよ、心深先輩、坂巻君に何言わせて」

坂巻の言葉の羅列に、部室の奥から五月が顔を上げた瞬間、ドサッ

心深の背後、廊下から鈍い音がした。坂巻がはつと我に帰りそつちに手をやると、口を半開きにしたまいまの姿。横には鞄が落ちている。

「……」「、『めんなさい。聞く気は、なかつたんですけど……』」

田を丸く見開いて、まいみは咳くような声。坂巻は慌てて、
「ちよ、違うんだ、これは……」

「そんな、大丈夫ですよ。他人に言いふらしたりしませんから。言い訳なんてしなくても。だって先輩、心の底から『愛してるー』って言つてましたし」

まいみは病人を労わるような笑みを浮かべている。余計に焦る坂巻は、

「いや、だから違うんだって。こんな性悪先輩に愛とか。ありえない。もう、ありえなさ過ぎるよ。五月にこそ労るが、それでも去年、この人が僕に何をどれだけしたか。それを僕が」と、その横から

「あ、あなたがまいみちゃん?」

心深が顔を出してきた。まいみは坂巻の弁解を完全に聞き流しながらそつちに顔を向け、

「あ、はい」

「うふ、初々しいわね~。五月ちゃんも入学当初はこんな感じだったんだけど」

部室の中で、五月がぴくつと顔を引きつらせた。

「初めてまして、まいみちゃん。私は去年こここの部長をやつてた心深。今、大学生。今日はまいみちゃんに会いに遊びに来たのよ」

「あ、初めてまして。今年入部した花塚まいみです」

言いながら、ぺこりとお辞儀をする。

「去年の部長さんですか~。どんな人か話は聞いてましたけど、力ツコいいですね」

まいみは心深の肩の向こうを見つめながら、

「カツコよすぎます。ぜひ先輩の妹にしてもらいたいくらいです。

毎日先輩の家に通いますよ。朝も昼も夜も、まいみがご飯作りますし。掃除も洗濯も任せてください。お背中だつて流しま

パチン

心深が指を鳴らした。すると、まいみはハツと田の焦点を心深の

顔に戻し、

「へ？ 今私、何を言つて……？」

「うふ。分かつた？ これが私の能力、精神操作」

「精神操作？」

「そ。私と田を合わせると、それだけで心の中を支配できるの」

「へ～」

心底感嘆した声を出すまいみ。横から坂巻が

「ね、分かつた、まいみちゃん？ さつきのはこの人にずっと言わされてー」

「ところで坂巻君？」

部屋の中から、室温を五度下げるようなおどりおどりしこ声が響いてきた。ギクッとした坂巻がそろりと部屋に視線を向けると、そこには微笑を浮かべた五月の顔。額に青筋が立っている。

「さつきの君の発言。言葉の理解があまり得意じやない私には良く分からなかつたんだけど、何か君、私が世界一の性悪みたいな言い方、してませんでした？」

坂巻は滝のような汗を流しながら、

「……いや、めつそつも」

「嘘つくなつ！ 誰が性悪よつ！ あんたこそ人のことないがしろにするくせにつー！ この前の買出しのときだつてそうだつたじやないつ！」

「い、いや、あれはお前が勝手に言い出したんだろ。僕の予定も聞かずに」

「だつてあれば仕事よつ！ 義務よつ！」

「それにしたつて、タイミングつてのがあるだろ。じゃあ、僕も言わせてもらうが

「

結局始まつた二人の言い争いを、心深とまいまは並んで椅子に座つて傍観している。

「あのお一人、事あることに喧嘩してて、仲悪いですよね。私もいつも冷や冷やしてるんです。去年もこんなだったんですね？」
「そんなことないわよ？ だってあの一人、去年の今頃付き合っていたもの」

「え？」

声を裏返すまいみ。心深はまいみの方に顔を向け、「めっちゃ仲良かったのよ、あの一人。目も当てられないくらいにね。登下校も毎日一緒にたんだから。五月ちゃんが弁当作って来たりとか」

「ええ？ ……でも、そんな……じゃあ、今……」

「うん、私の能力で記憶を変えたのよ」

心深は破顔した笑顔で大きく一つ頷いた。まいみは鯉のように口を開け、

「そ、そんな」とできるんですかあ？」

「簡単、簡単」

「だつてだつて、それって一年前なんですよね？ 今も効いてるんですか？」

「私が完全に記憶を捻じ曲げちゃったからね。忘れてるというか、もう一人にはそんな記憶ないんじゃない？ 人の思考なんて電気信号だし、記憶だつてつきつめれば分子の形状でしかないもの。記憶の操作なんて造作もないことよ」

「そんな、お二人がかわいそうですよ～」

眉をハの字にして眉間にシワを寄せるまいみ。しかし心深は含み笑いで、

「そうでもないわよ。あのまいまいってたら、きっと今頃は喧嘩して別れてたわ。何か、上っ面だけで付き合つてた感じ？ むしろ今の方が心は近いんじゃないかしら」

「でも、そばにいるつてだけで、距離が近づいたりとかしてるとほ思えないんですが……」

「ま、執行猶予みたいなもんだわね。有罪か無罪か。是か非か。ふ

ふ。あなたにもまだ希望はあるってことね」「ちよ、な、何言つてるんですかあ、心深先輩！」

「うふふ。じや、活動の邪魔しちゃ悪いし、まいみちゃんも見れたし、私はそろそろ帰るわ」

言いながら心深は微笑み、そして立ち上がりて部室を後にした。

「『EVA部』も、当分は賑やかそうだわね。ふふふ」

(後書き)

あとがき

本作「ESP部のとある軌条」を持ちまして、式織の「ESP部シリーズ」は一区切りとさせていただきます。ありがとうございます。ありがとうございました。

「とある日常」を含め、このシリーズのコンセプトは「超能力設定の隙間産業」といった所でしょうか。

超能力なるものが物語の道具として使われる際、ストーリーを成り立たせたりスマーズにしたりするため、埋められている隙間がありますが、これを主軸に（できるだけ）持つて行こうとしたのが、このシリーズだつたりします。

もちろんそういう設定は話が広がらないから省かれてるわけで、必然的に短編になるしかなかつたわけです。ここまでキャラを立てたんだから今から長編書けないかなとも思つたんですが、現実味はないですね。

一応順番に並べますと、
「ESP部のとある日常」
「ESP部のとある現状」
「ESP部のとある身上」
「ESP部のとある登場」
「ESP部のとある事情」
「ESP部のとある軌条」となつております。

順番に読んで頂くとスマーズに行くと思いますが、ぱらぱらに読んで頂いても擬似叙述トリックのような楽しみ方ができるかもしれません

ません。

といふわけではありますまいが、他の作品の方もなかなかいいんだそれで、また興味あります。

式織 檻

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9737c/>

ESP部のとある軌条

2010年10月8日15時33分発行